

老齢動物の病気について

前号では、MRの症状が悪化したステージCとDの治療、主に利尿薬についてお話ししました。MRはステージDになると、ひどい咳込みや呼吸困難など見ているのもつらそうな症状が続きます。入退院を繰り返すことも多く見られます。MRは進行性の疾患なので、一度薬で良くなっても、QOL（生活の質）を維持するためにはだんだんと薬の種類や量が増えてきます。それでも、ピモベンタンをはじめ、より安全で効果のある薬剤が開発されたので十数年前に比較すると、QOLを維持したまま長生きさせることができるようになりました。それでも、症状が出てから（ステージCに入って以降）は進行が早く、そこから投薬治療を開始した場合の生存期間は6カ月～3年ほどという報告もあります。

えっ？ そんなに短い？と思われる方も多いと思います。もちろん、定期的な検査でその時々ワンちゃんの状態を把握し適切な投薬によりもっと長生きできる子も多くいますが、MRは進行性の疾患で進行する弁の変化を食い止める薬はありません。しかし近年、人と同様に人工心肺を使って心臓を止めて心臓の弁を修復する手術が犬においても行えるようになりました。

この僧帽弁修復術は根本的治療として有効であると考えられていますが、手術前の心臓の状態によっては完全に逆流が消失しない場合もあります。原因は僧帽弁の病変の程度と犬の心臓の大きさや人工腱索とのマッチングなど複雑です。病気が進行するほど、麻酔・手術のリスクも高まります。従って手術適応となるの

② 犬の僧帽弁閉鎖不全症（MR）

8.MRと診断された時、飼い主は何をすべきか？
～MRの治療について
(その3 外科治療〈心臓手術について〉)～

文・写真 中西章男
text & photo by Akio Nakanishi



は、いったんステージCになったが治療により初期のCを維持できている場合と、投薬で症状が消え臨床的にはステージB2の状態にある場合となります。ステージが進行するほど手術のリスクは高まりますし、手術後の予後も変わってきます。この手術はひとりの優秀な外科医がいるから成功するものではなく、成功には、それぞれの役目をもったトレーニングを積んだ手術スタッフのチームワークが大切です。よって適切に適応を診断して安全な手術が可能な病院は限ら

れています。

今号では主にMRの外科的治療について解説しました。手術の予算としては乗用車を買える程度の費用が必要です。さらに言えばもし手術を行うのなら、「MRの症状がいったん悪化したのが治療により症状が改善した時」が最も有効な手術の時期かもしれません。飼い主さんは、MRの疑いがあるとわかった段階から、治療法として手術という選択肢があることも心にとめておいてください。（次号に続く）



Profile

獣医師・獣医学博士。1959年生。1986年日本獣医畜産大学（現日本獣医生命科学大学）大学院博士課程卒。大学ではフィラリア症の血行動態、腫瘍および外科の免疫について研究。1987年東京都杉並区で「阿佐谷ペットクリニック」を開院。小動物の総合診療医として犬猫のみならずウサギ、小鳥、ハムスター、モルモットなど数々の動物を診療してきた。趣味：ゴルフ、モータースポーツ、機械いじり、動物たちとの戯れ。著書：『車イスに乗ったチロ』集英社